五大山

NO1　南禅寺　仏光寺　金閣寺　菩薩頂　園照寺　顕通寺　羅候寺　塔院寺　万佛閣　殊像寺

NO2　碧山寺　龍泉寺　鎮海寺　南山寺　：竹林寺　普化寺　大同の町　応県木塔　懸空寺　善化寺　九龍壁　上下華厳寺

NO3　雲岡石窟　鎮国寺　双林寺　平遥古城

NO4　玄中寺　双塔寺　崇善寺　天龍山石窟　晋祠

寺は僧侶のない寺

南禅寺　仏光寺　金閣寺　菩薩頂　園照寺　顕通寺　羅候寺　塔院寺　万佛閣　殊像寺

太原市：中華人民共和国山西省の省都。中国の古都の一つで、2500 年の歴史がある。３２０万人の都市主な産業は、石炭・重工業で有り、農作物はコムギ、イネ、トウモロコシ、コーリャン、豆、イモなど。山西省の石炭の売上は中国の１/３である。昔日本軍が石炭を欲しい為の戦争の地で有った。日中戦争では日本軍に占領された。漢民族にとって太原は北方の守りの要衝であった。海抜は最高で 2,670m、最低点は 760m

五台山：五台山の特色は、2800～3000 メートルの険しい高地に５つの峰があることから五台山と呼ばれる。この仏教の聖山に「中国之最」があった。四川省の峨眉山や舟山諸島の普陀山、安徽省の九華山と並んで中国の四大仏教名山に数えられる聖なる山、五台山。仏教寺院とラマ教寺院が共存する所。ラマ教信者が多い内モンゴルに近いという地理的条件のためか、仏教寺院の青廟ばかりではなく、ラマ教の黄廟も数多く残っている。この仏教の一大聖地には、かつて入唐、入宋して修行した日本人の僧侶も多数訪れている。「入唐求法巡礼行記」を書いた最澄の弟子である慈覚大師円仁、興福寺の霊仙、京都南禅寺の宝叡などがこの地に滞在したという記録も残っている。かつての日本人僧侶は仏の道を学ぶために中国に渡った。そして現代の中国の研究者は奈良、大和の古刹を中国唐代の仏教寺院と重ね合わせる。中国にはその時代の木造建築の寺院がほとんど現存していない。中国最古の木造建築である南禅寺は険しい山中にひっそりと建っていたため、戦災からの焼失を免れたと言われている。しかし日本と中国の最古の木造建築がともに仏教寺院であるということは、とても興味深い。これも仏のえにしなのかもしれない。五台山の特色は、仏教寺院とラマ教寺院が共存するところだ。ラマ教信者が多い内モンゴルに近いという地理的条件のためか、仏教寺院の青廟ばかりではなく、ラマ教の黄廟も数多く残っている。

五台山の入り口　山門

山号閣

五台山の石碑

五台山料金所より町の中心部まで車で 30 分

五台山中心部の鳥居

五台山中心部の大きな石碑

何処からでも見えるシンボルの白塔

南禅寺：山西省忻州市五台県李家村五台山　華厳宗　本尊は釈迦牟尼、文殊菩薩、普賢菩薩

僧侶居ない寺。五台山山中にある南禅寺は建中三年（７８１年）に建立された。殿内の梁の下に墨書されており、現存する木造建築では**中国一古い**と言われている。この寺院は 1200 年以上前に建立されたことになる。南禅寺は台懐鎮の西南 22km の李家荘にある。寺は南向きで、敷地面積は 4100 ㎡である。五台山地区では一寺一堂の最も規模の小さい寺院ではある、のどかな農村の小さな丘の上にある。現在、僧はおらず老人夫婦が管理している。

五台山のほかに、大同や平遥古城周辺にも歴史的木造建築が残り、国家の保護指定を受ける建造物の 70%以上が山西省に集中する。南禅寺の当初の規模はよく分からないが、莫高窟第 61 窟の『五臺山圖』にその姿が描かれていることを思えば、当時からよく知られた寺院であったことは事実である。大殿は中間：脇間は３対２、柱総間 11,725mm の方三間仏堂で、堂内に柱は設けられていない。内部の架構をみると、角の尾垂木を脇間中央部分まで持出し、その上に斗キョウが設けられ、その４隅の斗キョウを結ぶように桁が廻されている。その間の梁は二重梁とされる。外周部は、柱上に設けられた朴訥な二手先の斗キョウと二重の通し肘木、丸垂木の隅扇が単純な中にも力強さを感じさせる。

特に不思議なのはこの仏殿が五台山でただ一つ、唐の武宗による大規模な滅仏と寺院破壊を免れたことである。思うにその原因は、南禅寺が五台山周縁部の辺鄙な場所にあり、しかも規模が大きくなかったことにあるようだ。南禅寺が滅仏による破却を免れたのは歴史の偶然であり、我々にとっては幸運なことだったと言える。南禅寺は訪れる人に中唐建築の風格を堪能させてくれるに違いない。

大仏殿は間口、奥行きとも 3 間で、ほぼ正方形の寄せ棟の斗拱式建築である。殿内には柱がなく、木組は比較的単純で、軒の出が深く、大棟が短く、鴟尾は質朴である。特に屋根の曲線が緩やかで、屋根の勾配は 5 分の 1 にも達しない。これは中国古建築の中で最も屋根の傾斜が緩やかな建築である。大仏殿は中国で最も古い木造建築で、そこに示された唐代の建築美学は、人々の注目を集めている。

殿内には 17 尊の塑像がある。そのうち大部分が唐代のオリジナルである。本尊は花を弄びながら説法する釈迦像で、左右には獅子に乗った文殊と象を御する普賢が控えている。像は主副が明瞭で、動と静が結合されている。その姿は生き生きしており、技工は精妙を極める。特に彩色塑像のうち、あでやかな脇侍菩薩と意気天を衝く四天王が精緻である。仏壇の周囲には唐代の彫刻レンガが 70 枚あり、その彫刻は朴実かつ洗練されている。この他、寺内にある三尊の石獅子と小石塔も唐代の遺物で、高い文化的価値がある。

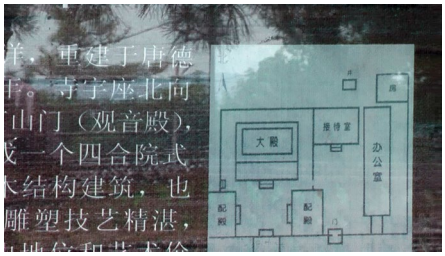
中国では小さな寺、本堂は六間四面ですかね。この時代には、鐘突き堂・太鼓堂はありません。宗派も無いとの事でした。坊主居ない寺で 70 歳ぐらいのお爺さんが管理している中は余り見せてもらえない、本堂の屋根は本葺きで垂木は丸太の扇垂木・素朴な『ふうたい』が、ぶらさがっていました。両サイドに配殿正面に大殿：日本の南禅寺は臨済宗で南禅寺派です。

寄棟で屋根には鴟尾（しび）が付いています、鴟尾は日本では飛鳥時代から、中国は３世紀頃からだそうです。建物の大棟の両端を強く反り上がらせるところに起源があると考えられています。中国漢代の墓に副葬されているミニチュアの建物にはすでに鴟尾が表現されています。

※鴟尾 (しび) 後漢(１世紀～３世紀前半)以降、中国では、大棟の両端を強く反り上げる傾向が見られ、これが変化して３世紀から５世紀(晋代)頃に鴟尾となりました。 唐代末には鴟尾は魚形化し、鯱へと変身しました。

南禅寺石碑

素朴な山門

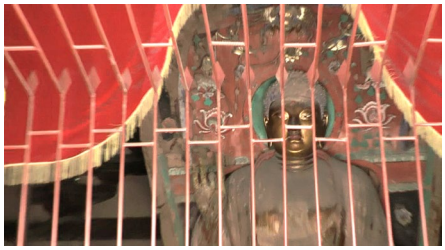


南禅寺見取図中国では小さな寺

寄棟でスッキリした小さな本堂

山門も素朴です。

お釈迦様が檻の中に入っています。



1200 年の歴史を背負ったお釈迦様。

扇垂木に斗組 2 手先・素朴な風袋。

1200 年良く耐えています。

鴟尾（しび）

背割りした丸太の垂木に本葺き瓦に家紋。

山中の田舎にひっそりと。

仏光寺：僧侶居ない寺 857 年に建立された大殿は、南禅寺（782 年）、広仁王廟正殿（831 年）に次いで中国に現存する 3 番目に古い木造建築物である。佛光寺は初め、北魏の孝文帝（在位 471 年 - 499 年）のときに建てられ、785 年から 820 年にかけて高さ 32 メートルに及ぶ九間三層の弥勒大閣が加えられた。唐の 845 年に武宗が**会昌の廃仏**を進めると、祖師塔を除いて創建時の堂宇のほとんどが焼かれてしまう。12 年後の 857 年、焼失した弥勒大閣の跡地に大殿が建てられた奈良の唐招提寺金堂は晩唐の建築様式の影響を受けている。

仏光寺は、北魏孝文帝の時代に創建され、唐代の武宗帝の時代に出された廃仏令のために破壊されたが、８５７年に再建された。隋・唐代にはその名声は日本にも届くほどだった。莫高窟の第６１窟の壁画、五台山図にも描かれている。現在、北魏時代のものは六角形の祖師塔だけだが、本殿にあたる東大殿は唐代の建築である。唐代の木造古代建築は、中国全土でわずかに四個所しか残されていない。そのすべてが、山西省にあり、そのひとつがこの仏光寺だ。しかし、この仏光寺も時の流れの中で忘れ去られ、再発見されたのが、１９３０年代建築家で学者でもあった梁思成（りょう しせい）氏の手によるものだった。それまで、中国には唐代の建築物は現存しないと考えられていたが、彼の調査・研究によって、最初にこの仏光寺が唐代の建築物として認められた。それは、殿外の石柱と棟木に刻まれた年号「唐大中１１年」（西暦８５７年）が

決め手となった。木造で作られた大殿は日本人好みの荘厳さを持ち、斗栱(ときょう)と呼ばれる屋根を支える木組みの巧みさは、職人技を見せつけ、屋根に載る鴟尾（しび）の様は、日本の東大寺を連想させた。また内部には、唐代の 35 体の塑像と明代の五百羅漢が並んでいる。塑像の装飾は後代のようだが、豊満な仏像は唐代の様式をよく留めている。一体が３mはあるだろうか、非常に巨大ではあるが、威圧感がなく、優しく包み込んでくれるような印象を与える。また壁画も唐代のもので、敦煌の莫高窟の壁画に通じるものがある。入り口左手には文殊殿があり、金代の創建。内部には金代に作られた文殊菩薩と侍者の塑像、明代に五百羅漢の塑像がある。この建物も金代の創建ということで、貴重な建物なのだが、東大殿の重要さの影に隠れてしまっている。五台山に来て、仏光寺を訪れなければ、五台山に来た意味がないほど、必見の建物である。この時代には、鐘突き堂・太鼓堂はありません。

仏光寺の東大殿は 857 年の建築。塑像は晩唐のものらしく、豊満でやや重い感じがあるが、立派なものである。寺は田園の中の小高い丘にあり、環境もすばらしい。寺内に現存する歴代の殿宇は中国建築史を研究する上での最良の実物資料であり、このような素晴らしい木造建築の傑作は世界的にも稀なので、「アジアの仏光」と称えられている。

仏光寺は紀元 5 世紀、北魏の孝文帝の時期に創建された。しかし唐の武宗による「会昌滅仏」の際に破却され、宣宗（せんそう）（唐朝の第 19 代皇帝）の時に再建された。そして金代には文殊殿が建てられ、明清期には天王殿、伽藍堂、万善堂、香風花雨楼、廂房などが修築された。このうち最も価値があるのが正殿と文殊殿である。

仏光寺は西向きで、正殿が一番東にあるので俗に東大殿と呼ばれている。正殿は唐の宣宗の大中 11 年（857 年）、願誠和尚の唱導下、女弟子の寧公遇が資金を提供し、弥勒大殿旧址の基礎の上に再建された。このため殿内にはこの二人の塑像がある。正殿は仏光寺最古、最大の建築で、中国に現存する古建築中、最古の仏殿の一つである。正殿は、間口 7 間、奥行き 4 間の寄棟造りで、その建築様式と構造は、鑑真和尚が日本の奈良に創建した唐招提寺金堂に極めてよく似ている。そしてまた、中国に現存する最も規模の大きい唐代建築でもある。

正殿内外の柱の上には構造が複雑で、形の古拙な斗栱(ときょう)があって梁を支えている。特に注目に値するのは、左右にある 4 本の梁の下に残された唐の人々の雄渾、洒脱な墨痕である。これらの墨書は唐代人の気風と態度を如実に示している。正殿内の梁は天井の部分で露出した部分と隠れた部分に分かれていて、早期の彩色の痕跡が残っているものもある。このうち人物の絵は、姿が優雅かつリアルで、唐代壁画の良品である。大棟両端の大きな鴟尾は唐代の原物で、これも極めて貴重なものである。

殿内の磚を積んで作られた須弥壇は間口 5 間、奥行き 1 間半で、1 間に 1 尊の仏像が安置されている。主仏はそれぞれ釈迦、弥勒、阿弥陀、普賢、文殊である。各主仏の両側と前には脇侍菩薩と象や獅子を引く従者の像がある。このほか両側の角には金剛力士などの像があり、合計 35 体の塑像がある。この生けるがごとき塑像はすべて唐代のオリジナルで、中国仏教が最も栄えていたころの代表作である。

注目を引くのは、仏光寺では文殊と普賢の位置が通常とは異なることである。文殊を右に配し、普賢を左に配したのは、五台山が文殊の道場であることを際立たせるためなのだろう。

仏光寺は、たった一棟の仏殿に多くの宝物があり、中でも唐代の建築、墨跡、壁画、塑像は仏光寺の四絶と呼ばれている。大殿内の両側と後壁にある五百羅漢は明代の塑像ではあるが、これも非常に芸術的価値が高い。

寺の前庭北側は文殊院である。文殊院は築年や規模が正殿にやや劣り、金の天会 15 年（1137 年）に建立されている。建物は間口 7 間、奥行き 4 間の切妻造りで、五台山に現存する唯一の金代建築である。この仏殿の特殊な点は、他に例を見ない独特の減柱法にある。殿内の空間を広げるため、前面は 2 間または 3 間にまたがる長い梁を用いて柱を取り去り、後面は斜めの構造材を使って負荷を減じている。このため、この仏殿の横梁は「人」の字型をしている。この特殊な減柱法は中国建築史上でも非常に珍しいものである。

文殊殿の大棟中央にある瑠璃の宝刹は元代初期の旧制によるものである。殿内に祭られている文殊菩薩騎獅子像と六尊の侍立菩薩像はみな金代塑像の逸品である。また殿内四周にある五百羅漢の壁画も明大の佳作で

ある。
この他、仏光寺は墓塔にも特色がある。そのうち東大殿南側にある質朴な形の祖師塔は、寺内唯一の北魏期の建造物である。解脱禅師塔、無垢浄光塔、志遠和尚塔、大徳方便和尚塔等はどれも唐代の塔である。仏光寺の唐塔はデザインが複雑で形が変化に富む。方形もあれば円形もあり、6 角形、八角形のものもあり、ここを見れば中国墓塔の基本的発展状況が一目で理解できる。
仏光寺の特徴は、千年の風雪を経、歴代の補修が行われたにもかかわらず終始唐代の風貌を保ってきたことにあり、世にもまれな国宝と言えるだろう。著名な古建築研究家の梁思成は仏光寺について、「魏斉唐宋の建築を 1 寺に集めたただ一つの例であり、一殿に唐代の四種の芸術を集めたただ一つの例である」と仏光寺の建築の特色を概括している。

仏光寺入り口。

山の中腹に立派な大きな寺

広い境内に多くの伽藍

急な階段、怖いです上がると本堂

素朴な大きな文殊殿は寄棟

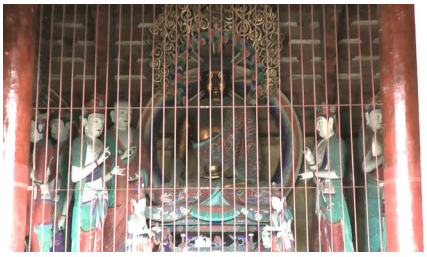
山号額何年過ぎていますか。

背割りした丸太の扇垂木に尾垂木

本葺き瓦には家紋

唐代の鴟尾（しび）

屋根の中心には何を表現していますか


檻に入った釈迦如来

良い顔している、残念、鉄格子が邪魔

文殊菩薩　　古い梵鐘何時の時代のものですか？　　北魏時代の祖師塔

塔は六角形で祖師塔　　北魏時代の祖師の大徳方便和尚像ですか　　８月末なのに日本の秋

金閣寺：五台山南台の峰にある寺院です。唐の代宗は不空三蔵(705 年～774 年)の願いに応じて、「常に仁王護国経及び密厳経を転ず」という勅命を下し、国家鎮護の大寺院として建立。南台の標高 1900m の山腹にあり、唐代の 770 年に創建された。銅で造った瓦に金を塗り、 仏閣にも金箔を貼ったところから金閣寺と命名されました。現在は金の色ではない。正殿には高さ 17.7m の千手観音像が納められている。左右に立派な鐘突き堂・太鼓堂あった。唐代に日本僧霊仙三蔵が修行した寺でもある。

夕方で門が閉まって入れませんでした、残念です。

日本僧霊仙三蔵（りょうせん、759 年?〈天平宝字 3 年?〉 - 827 年?〈天長 4 年?〉）は、日本の平安時代前期の法相宗（唯識宗・慈恩宗）の僧であり、日本で唯一の三蔵法師。出自については不明であるが、近江国（現・滋賀県）の出身とも阿波国（現・徳島県）出身とも伝えられる。「霊船」「霊宣」「霊仙三蔵」とも称される。興福寺に学び、804 年（和の延暦 23 年、唐の貞元 20 年）には第 18 次遣唐使の一人として 45 歳で入唐した。同期に最澄・空海・橘逸勢らがいる。長安で学び、810 年（唐の元和 5 年）には醴泉寺（れいせんじ）にて、カシミールから来た般若三蔵が請来した「大乗本生心地観経」を翻訳する際の筆受・訳語（おさ）を務めた。811 年（唐の元和 6 年）、「三蔵法師」の号を与えられる。時の唐の皇帝・憲宗は仏教の熱心な保護者であり、霊仙も寵愛を受けて大元帥法の秘法を受ける便宜を与えられるが、仏教の秘伝が国内から失われることを恐れた憲宗によって日本への帰国を禁じられた。憲宗が反仏教徒に暗殺されると、迫害を恐れて五台山に移る。

825 年（唐の宝暦 2 年、和の天長 2 年）には、淳和天皇から渤海（ぼっかい、698 年～926 年）の僧・貞素に託された黄金を受け取り、その返礼として仏舎利や経典を貞素に託して日本に届けさせた。日本側は貞素の労苦を労うとともに霊仙への追加の黄金の送付を依頼し、また、日本に残された霊仙の弟妹に阿波国の稲千束を支給するよう計らった。その後、828 年（唐の大和 2 年、和の天長 5 年）までの間に没したようで、一説によれば霊境寺の浴室院で毒殺されたという。唐に渡ってから死ぬまで日本の地を踏むことはなかった。

840 年（唐の開成 5 年、和の承和 7 年）7- 8 月、霊境寺に立ち寄った円仁が、入唐留学僧・霊仙の最期の様子を聞いている。また、円行・常暁（じょうぎょう）（入唐八家（最澄・空海・常暁・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡）が入唐した際には霊仙の門人であった僧侶から手厚く遇されて霊仙の遺物や大元帥法の秘伝などを授けられて日本に持ち帰ったという。

霊仙三蔵は、最澄や空海らと共に遣唐使船に乗って唐に留学していながら、圧倒的にその知名度は低い。地元では、「霊仙三蔵顕彰の会」が発足し、改めて郷土の偉大な高僧の生涯を広く紹介しようと活動を行っている。その事業の一環として平成 16 年に霊仙三蔵記念堂が建立。西暦 759 年、現在の滋賀県米原町霊仙山麓の地に生まれる。この地の豪族・息長丹生真人の一族。15 歳の頃まで霊仙山にある寺院（松尾寺など）で修行する。

15 歳の頃に奈良の興福寺に入山。法相宗の教義と漢語を習得する。45 歳の頃に最澄や空海らと共に遣唐使船に乗って唐に渡る。長安では、梵語（サンスクリット語）も習得するが、これが転機となる。時の憲宗皇帝は、長安の寺院に納められていた「大乗本生心地観経」の訳教に霊仙を氏名。これを 811 年に完成させた功績により、憲宗皇帝から三蔵の称号を与えられた。

しかし、憲宗皇帝が反仏教派の手によって暗殺されると状況は一変。仏教徒弾圧を避けるために、820 年に

霊仙三蔵は修行の地を長安から五台山に移す。しかし 827 年に不慮の死を遂げ、日本の地を再び踏むことなく 87 歳の生涯を終えた。

死因については霊仙三蔵の功績を妬む僧の手による暗殺とされている。三蔵が長期間にわたって唐で修行・研究に打ち込めたのは日本の仏教界からその才能を高く評価されていなかったからである（最澄も空海も短期間で「開祖」の資格を得て帰国することが使命であった）。おかげで憲宗皇帝の目に止まったのだが、晩年逆にその才能が仇となったといえる。最澄も空海も名だたる高僧であるが、霊仙三蔵の功績も、もっと評価されるべきです。創建８４０年、円仁がここ五臺山に上った時にこの名刹にも立ち寄っている。その時円仁は先年竹林寺で亡くなった霊仙上人の手皮の仏像も見ることができた。

立派な山門この上に本堂

遅いから中に入れず

立派な山号額

入り口だけで奥の本堂は見れません

鐘楼

鼓楼　左奥には白塔

二本の石柱に立派な彫り物

山中のお寺

菩薩頂：五台山の霊鷲峰にある、北魏建立、真容院と呼んだ、清時代康熙帝勅命で修復、黄色い瑠璃瓦使用可なり、皇族建築と昇格、康熙帝、乾隆帝何回訪問し、書を残した・菩薩頂は文殊菩薩の居所とされ、北魏時代の創建。もともと山の麓の顕通寺の一部だったが、明代以降、ラマ教寺院となり独立、黄廟一の寺となった。文殊菩薩像がありました。菩薩頂は廟群（台懐鎮）の中ではいちばん高い所に位置している。顕通寺から１０８段の石段を登りきったところにある。初期は顕通寺の一部であった。清の順治帝以降、ラマ教に変えられ２５あるラマ教の寺院の代表する寺院になっている。文殊は,舎衛国のバラモンの子で仏（釈迦）が亡くなった後の実在の人物と言われている。菩薩頂は別名**清涼寺とも言われています。**【三人よれば文殊の知恵】といわれるように智をつかさどる菩薩といわれている。仏教の経典にでてくる【文殊菩薩像】は獅子にまたがり、右手に剣、左手に経典を持つのが一般的とされています。経典は知恵の象徴、剣はその知恵が研ぎ澄まされている様をいい、獅子はその知恵の勢いが盛んであることを表現していると言われています。

菩薩頂は清代には歴代皇帝の五台山参拝の時の宿所でしたし、清涼寺とも言われている寺でもあった。菩薩頂は五台山にもっともゆかりのある文殊菩薩の居所と考えられている寺である。

円仁が、ここ五台山に登った頃は大華厳寺の菩薩堂院であったそうです。

108 の階段大変です（煩悩ですか）？

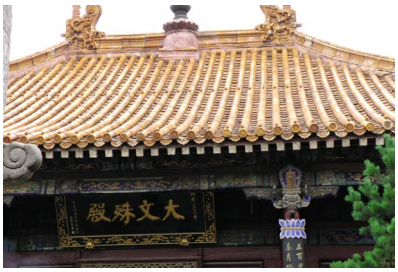
大勢の観光客と山門

108 の煩悩を噛締め階段を上る僧侶

上から見る怖い急な階段

山門・風袋があります

下界は五台山市街の中心部です



文殊菩薩の安置の伽藍

立派な山号額

文殊菩薩

エンジの色のラマ教の僧侶、尼さんも

大勢の観光客

二層式立派な本殿

垂木の先端まで手が施されています

釈迦像

近代的です・裏の山門

右に立派な鐘突き堂

左に立派な太鼓堂

園照寺：(普寧寺)、文殊菩薩右に古い鐘突き堂・左に太鼓堂、大きな古い白塔、堂内に 3 体の仏像１７５５年に

チベットのサムイエ（桑耶）寺を模して造られた。寺内に巨大な木彫りの大仏像が安置されていることから別名・大仏寺ともいう、1755 年創建、河北省の承徳避暑山荘の東北に位置する。面積 33,000 平方メートルあり、その名には「天の下、普（あまねく）永遠の安寧を」の意味が込められている。漢チベットの建築様式の風格を一体に融合したものである。前方は漢仏教の伝統の七堂伽藍方式の配置。主殿の大雄宝殿には三世仏をまつる。後ろ部分は９メール高さの基台の上にある。チベットの三摩耶廟に倣ったもので、大乗之閣を中心として「須弥山」と「九山八海」の構成になって、チベット族の建築の特徴とチベット仏教伝統の宇宙観を表している。大乗之閣は普寧寺の中心建物であり、高さ 36.75 メートル。閣頂には大４個小５個の先のとがった金頂をまとめて構成する金剛宝塔がある。廟内に立つのは金漆、木彫の千手千眼観世音菩薩、これは中国古代彫刻芸術の絶品である。仏像の高さは 22.28 メートル、重さ 110 トン、木造仏像としては世界一である。

山門

広い境内の　大きな山門

左に鐘楼

右には鼓楼

大きな本堂

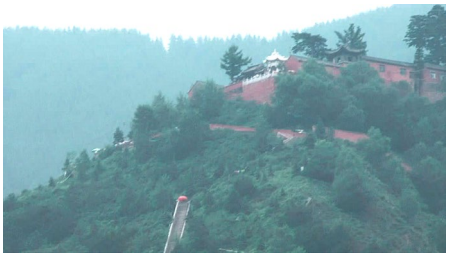
本堂には獅子に跨った文殊菩薩

大きな古い白塔

白塔の正面

大雄殿には３体の仏像中央にはお釈迦像

山の中腹から見た五台山市街


1080 階段を登ると黛螺頂・**五体の文殊菩薩像**。大勢の人が山頂に登って行きます。園照寺から見る黛螺頂、今回は登りませんでした。

顕通寺：五台山最古の寺、**漢明帝永平年（58～75 年）に建造され、建物と金閣で有名。敷地面積8万㎡五台山中心区、菩薩頂のふもとに位置する、洛陽の「白馬寺」と共に、中国で最も古い方の寺廟である現在「全国重点文物」として保護されている。五台山寺廟の中でも規模最大であり、4万 3700 ㎡の敷地内には、主な殿堂として「観音殿」「大文殊殿」「大雄宝殿」「無量殿」「千钵文殊殿」「铜殿」「藏経楼」等が挙げられる。仏事活動を行う場所である「大雄宝殿」殿内には「釈迦牟尼」「阿弥陀仏」「薬師仏」、軒のない珍しい造りの「無量殿」には「铜铸毗卢仏」が祀られ**

ている。「銅殿」には「万仏」や、国内でも稀な銅製品の数々が残されている。また、入り口手前の楼閣内には、銅時計「長鳴钟」が掛けられていて、表面には約一万字の仏経が彫られている。文物に興味があれば、「藏経殿」内の珍しい書画や、「華厳経字塔」がある。

五台山で最初に造られた寺である。中国に仏教が伝来したのがこの永平年間のことといわれ、中国最初の仏教寺院といわれる洛陽の白馬寺も、永平年間に造られた。顕通寺の創建が、中国仏教史上のなかで、かなり早い時期であったことが知れる。また、日本の曹洞宗の本山である永平寺の名も、ここから取られたという。

創建当初は、台懐鎮の西側の山脈は古代インドの霊鷲山に似ていることから、大孚霊鷲山と呼ばれたが、明代に太祖洪武帝（朱元璋）より「大顕通寺」の額を賜ったことから現在の顕通寺とした。

規模としても、五台山随一。五台山五大禅処のひとつでもある。現在の伽藍はいずれも明・清時代のもの。

「顕通寺は五台山の青廟の代表寺院です」「和尚さんの袈裟(けさ)は青（灰）色です。そして、ラマ僧の衣服は黄色です。ラマ寺院のことを黄廟といいます。黄廟の代表寺は菩薩頂です。五台山に99の青廟あります。」

門前の鐘楼、高さ 20.3m の明代建築の無量殿、大雄宝殿などの壮麗な建築を連ね、古代の打楽器の雲牌など残されている。国の重要文化財に指定された、古格漂う寺。

顯通寺无量殿 1500 年代末建立。無梁殿・七処九回殿ともいう。軒先は木造組物のように見えるが、全て石からの削り出しで、物全体はインド様式を模倣したものとされる。正面七つの礼拝口を有し、基本的な架構形式はドームである。これが無梁殿の名の由来となっている。

円仁は、主にここに滞在した。

円仁生年は七九四年（延暦 13 年）平安時代の始まりと同じ年で、下野国都賀郡壬生町、現在の壬生寺の地に豪族壬生氏の子として生まれる。兄からは儒学を勧められるが早くから仏教に心を寄せ、9 歳で大慈寺に入って修行を始める。大慈寺の師・広智は鑑真（奈良時代の帰化僧。日本における律宗の開祖）の直弟子道忠の弟子であるが、道忠は早くから最澄の理解者であって、多くの弟子を最澄に師事させている。15 歳のとき、唐より最澄が帰国して比叡山延暦寺を開いたと聞くとすぐに比叡に向かい、最澄に師事する。奈良仏教との反撃と真言密教の興隆という二重の障壁の中で天台宗の確立に立ち向かう師最澄に忠実に仕え、学問と修行に専念して師から深く愛される。最澄が止観（法華経の注釈書）を学ばせた弟子 10 人のうち、師の代講を任せられるようになったのは円仁ひとりであった。814 年（弘仁 5 年）、言試（国家試験）に合格、翌年得度（出家）する（21 歳）。816 年（弘仁 7 年）、三戒壇の一つ東大寺で具足戒（小乗 250 戒）を受ける（23 歳）。この年、師最澄の東国巡遊に従って故郷下野を訪れる。最澄のこの旅行は新しく立てた天台宗の法華一乗の教えを全国に広める為、全国に 6 箇所を選んでそこに宝塔を建て一千部八千巻の法華経を置いて地方教化・国利安福の中心地としようとするものであった。817年（弘仁 8 年）3 月 6 日、大乗戒を教授師として諸弟子に授けるとともに自らも大乗戒を受ける。性は円満にして温雅（おんが）、眉（まゆ）の太い人であったと言われる。日本の天台宗の開祖最澄を師としている。

浄土宗の開祖法然は、私淑する円仁の衣をまとい亡くなったという。

顕通寺の石碑

大きな山門雨にも係わらず大勢の観光客

山門から本堂へ長い山道

広い境内

本堂の正面は文殊菩薩

重層屋根の大きな大雄殿

本堂では大勢の信者達のお勤め

屋根の先端まで心配りの彫刻

お勤めが終り僧侶達が出てきました。

顯通寺无量殿（七堂大殿）

山に向かって金閣

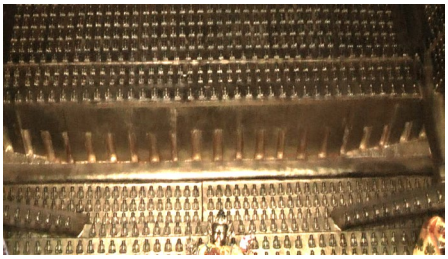
大変急な階段

【七堂大殿とは観音殿、文殊殿、大雄宝殿、無量殿、　千鉢殿、銅殿、蔵経殿並ぶ】。

日本の金閣寺（1397 年）どちらが先ですか？屋根まで金です、風袋もある

中には文殊菩薩多数の仏像（千仏ですか）

金のお堂の前に三つの金の塔立派です。**何を表現しているのですか。**



内部は天井まで何千体の仏像

六角の塔には全面に仏像

立派な石碑

羅候寺：唐創建、歴代修築、清朝黄廟一つとなる、開花現佛で有名。唐代初期の創建で、明代に再建された禅寺。

清の康熙、雍正、乾隆帝がたびたび参拝したところ。天王殿、文殊殿、大仏殿などの伽藍建築がほぼ完全に揃う。後殿の仏壇には蓮の花のカラクリがあり、中には 4 体の仏像が安置されている。

立派な山門

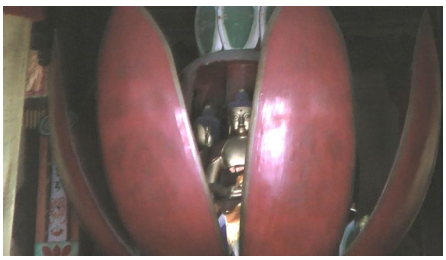
大きな山号額

左に大きく立派な鐘楼

右に大きく立派な鼓楼

本堂正面にはお釈迦様

本堂ではお勤め中



開花現佛殿。お釈迦様の誕生を意味している。蓮の花がカラクリで回転すると蓮の花が開いたり、閉じたり致します。

塔院寺：唐代大華厳閣院、明 1407 大法王葛里麻のため。現存殿堂明 1578 年勅命によって大塔を建立。

五台山のシンボルである高さ 56,47mの白塔を持つ塔院寺がある。もともとは顕通寺の塔院だったが、明代に独立してひとつの寺院になった。白塔の白は米のとぎ汁でこねた石灰で塗られているそうです。

大白塔にはインドのアショーカ王(在位 BC268 年頃～BC232 年頃) の造った、舎利容器と文殊髪塔が奉納されていると伝えられています。**独立した寺院ではなく、顕通寺の一部でした。正式の塔の名前は釈迦牟尼舎利塔といいます。**

もともとチベット仏教式の塔ですが、下の部分には仏殿があり、文殊、観世音、普賢、地蔵の 4 菩薩と釈迦像を安置している。外壁には 252 個の風鐸が下がり、微風にも涼やかな音を響かせる。境内には他に大雄宝殿と経典 2 万冊を納めた八角形の蔵経閣がある。

唐の時代に日本の円仁和尚がここに来て詠った詩があります。【遠く台頂を望めば、円く高くして樹木を見ず、地に伏して遥かに礼し覚えず涙を雨ふらす。】

塔院寺山門　白塔の大きさが良く判る

大きな石塔

山門

大きな立派な山号額

雨にも係わらず大勢の観光客

左奥に鐘楼

右には鼓楼の奥に大きな太鼓が見えます。

大雄殿

ラマ教の仏様ですか？

チベット仏教式の大きなマニ車

大きなマニ車

白塔の下、全周マニ車

五台山のシンボル塔院寺　　五台山の何処からでも見える白塔

万佛閣：大道芸の舞台、広場　中国の大道芸ですか？　　山を降りた所に大きな広場　正面に舞台・左右には寺。
神社そして大きな香炉

大きな舞台

何を演劇していますか？

大きな香炉

左右には寺・お宮

後方にはシンボルの白塔

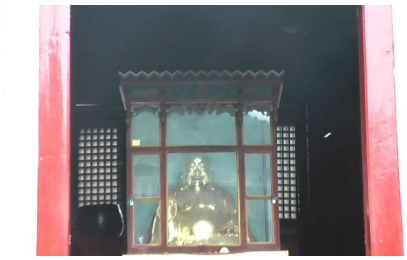
殊像寺：文殊像が祀られているため文殊住処・殊像寺と謂われています。唐の時代の創建です。元代に修建されたが火災で焼失し、明代成化 23 年(1487 年)に再建された。殊像寺にある文殊菩薩像は高さ 9.87 メートル、菩薩を象徴する獅子に乗っている。殿内のサン猊（サンゲイ）に乗った文殊菩薩の原像は清代に修復されたが、その際、頭部はそば粉を練って造ったといわれている。一つは文殊菩薩が正位置を占め、三世仏がお供として背面に祭られていることである。このような配置は中国の寺院では非常に珍しい、塑像の佳品である。背面に三世佛「薬師・釈迦・弥陀」その両側に五百羅漢が眼をひく。三面の壁に懸けられた渡海五百羅漢もみな塑像の傑作で、技術がすばらしいだけでなく、造形も生き生きしている。殊像寺には「般若の泉」があり、この水を飲めば「知恵が増す」と言われている

この寺は面白いところが二つあるが、これは文殊の地位を際立たせる狙いから来たものであろう。もう一つは過殿内の柱の上に遅れてきた羅漢済公がしゃがんでいることである。

殊像寺の後ろにはシンボルの白塔

立派な山号額

大文殊殿は二層式の大きな伽藍



何故かガラスのケースに布袋様

右に立派な鐘楼

左に立派な鼓楼